

【第15回年次大会 研究発表 要旨】

『青鞥』の尾竹紅吉とアンドロジニー androgyny 文学

齋藤理香

女性の精神的自立、また因習からの解放を訴え、近代フェミニズムのシンボルともなった女性集団、青鞥社とその機関誌『青鞥』（1911年創刊、1916年終刊）。そこで活躍した尾竹紅吉（1893-1966）は、青鞥社代表の平塚らいてう（1886-1971）とともに、そのメンバーとして、当時の女性の理想像である「良妻賢母」に真っ向から対立する「新しい女」の代表とも目された女性である。尾竹紅吉に関する研究は、渡辺（2001）による本格的な評伝のほか、青鞥社や青鞥文学に関する論考などもあるが、その中で紅吉は、男装の麗人として、またカフェで「五色の酒」を飲み、吉原の遊郭に繰り出す、という大げさな脚色を交えたスキャンダル記事の中心人物として紹介されることが多い。あるいは、彼女とらいてうとの同性の恋愛が、近代日本のレズビアニズムの一例として取り上げられもしている（黒澤 1996 など）。渡辺（2001）は、紅吉の文学的資質を高く評価しているが、紅吉の残した文学作品をくわしく批評または分析した研究は、渡辺（2001）が評伝の中でとりあげた2、3編を除いては、これまでのところ皆無と言ってよい。本発表は、そんな尾竹紅吉の文学作品に焦点をあて、特にその文体に見られる、彼女の男装の似合う外見に呼応するアンドロジニー androgyny の要素をとらえ、分析を試みたものである。

具体的には、紅吉が『青鞥』を去った後、自ら創刊した文学雑誌『紅番花（サフラン）』（1915年3月創刊、同年8月終刊）中の作品「自分の生活」（1914年3月号）と「Cの競争者」（1914年5月号）を取り上げる。そしてこの作品中の一人称の語り手が、1890年代から1910年代の女性筆者による作品と比較したとき、女性とも男性とも言い切れない「アンドロジニー＝中性性」を帯びているのではないかということをも指摘する。特に、語りの中性性^{アンドロジニー}が、紅吉の作品をどう特徴づけることになるのか、紅吉のテキストはフェミニズム批評の視点から、どのように評価できるのか、ということをも議論の中心とした。

「自分の生活」と「Cの競争者」は、「私」という一人称の語り手が「あなた」という対象に向かって語りかけるという対話構造から成っている。平田（1999）によれば、青鞥社の女性たちに先立つ書き手の一人・清水紫琴（1868-1933）の『こわれ指環』（1891）は、女性一人称の語り手「私」の語りかけの対象である「あなた」が、話の中で具体的に想定されている「玉のやうな乙女子たち」であると同時に、さらに話の外側にいる読者でもある、そういうテキストとして読めるという。読者とは、この場合、小説内の「あなた」と同類の、当時の若い女性たちをさしている。紫琴のテキストが、フェミニスト文学として読まれるのは、書き手と読み手の間で女性の声（ヴォイス）が交換されるという行為が成立しているからだと言える。同様に、本発表でも紅吉のテキストを、語り手の「私」と語りの対象の「あなた」、さらには読み手までを含めた関係性において分析する。その際、明らかにしたいのは、『こわれ指環』は会話体の語りから女性一人称のテキストなのが自明であるのに対し、紅吉の「自分の生活」と「Cの競争者」は、語り手の「私」が女性であると断じる要素が本文にはほとんどなく曖昧だということである。そのように一人称の語り手の性^{ジェンダー}が曖昧でも、呼びかけの対象「あなた」が女性であることが判明した時、

語り手の声^{ヴォイス}が物語の枠を超えて「あなた」を通じて読者に到達するのか、ということも考察の

対象とした。

本発表では、Robertson (1998)の説くアンドロジニーの概念化に基づいて、アンドロジニーとされる語り手の特徴を、「両性」または「両性具有性」としてのアンドロジニーではなく、セックスやジェンダーの差異を打ち消しあう「中性」としてのアンドロジニーと位置づけている。この

^{アンドロジニー}中性性を一人称の語りに援用すると、語りの会話体における女言葉、男言葉の区別を解消するこ

とはできる。しかし、その時の語りの^{アンドロジニー}中性性は、平田 (1999) や Saito (2010)が近代の女性作家

の作品に見出した女性一人称の語りの^{ヴォイス}声に拮抗する力を持ちえるのか。その点について特に問題提起を試みた。

[参考文献]

黒澤亜里子 (1996) 「一九一二年のらいてうと紅吉—女性解放とレズビアニズムをめぐる—」

『文学、社会へ地球へ』東京：三一書房

平田由美 (1999) 『女性表現の明治史』東京：岩波書店

渡辺澄子 (2001) 『青鞥の女・尾竹紅吉伝』東京：不二出版

Robertson, Jennifer (1998) *Takarazuka: Sexual Politics and Popular Culture in Modern Japan*. Berkeley, CA: University of California Press.

Saito, Rika. "Writing in Female Drag: Gendered Literature and a Woman's Voice." *Japanese Language and Literature*. No. 2, Vol. 44 (Fall 2010): 149-177.

(さいとう りか・ウェスタン・ミシガン大学准教授)